



Dialogue

Creating the Next 60 Years

『記念事業実施報告書』

2013年6月11日

献学60周年記念礼拝



献学60周年記念事業
国際基督教大学



Dialogue

Creating the Next 60 Years

ICU献学60周年記念事業 2013年6月11日(火)

真理を求め、自由を見出す-ICUの伝統と約束

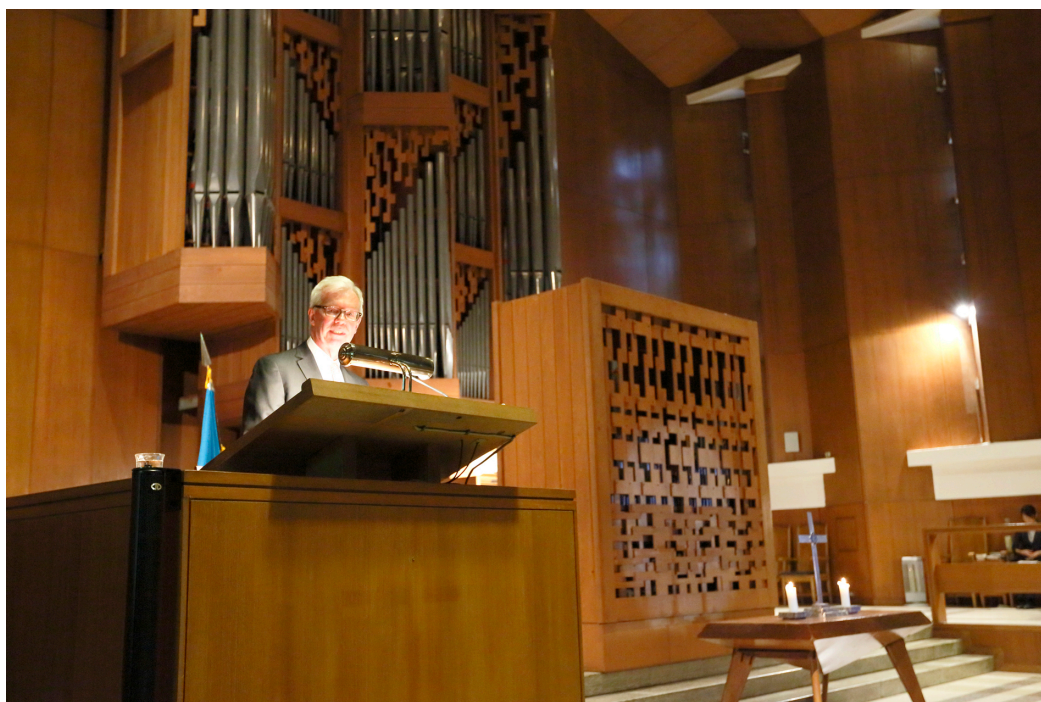
マイケル・ギリガン

(ヘンリー・ルース財団プレジデントアジアキリスト教主義高等教育支援財団 理事長)

於：東京、日本

はじめに：

日比谷潤子学長、高名な理事各位、それに教員、学生、卒業生の皆さま。本日は国際基督教大学の創立60周年を記念する行事に参加する機会をいただき、誠に光栄です。数ヶ月前、この大きな節目を迎えようとしている貴学にご招待いただいてからというもの、大変幸せな気持ちでおりました。大学の行政部の皆様やスタッフの方々がさまざまにご配慮くださり、温かく迎えてくださったおかげで、日本への最初の訪問は忘れがたいものとなることでしょう。しかも、このスピーチを、美しいこの国の言葉に翻訳していただいたとのこと。私は英語でお話せざるを得ませんが、日本語訳によって、本日お伝えしたいことが皆様により雄弁に伝わりますよう祈念しております。



Dialogue

Creating the Next 60 Years

次に、ニューヨークのヘンリー・ルース財団における私の同僚たちからのご挨拶を申し上げます。過去77年間にわたり、特にアメリカ人の東アジア、東南アジアに対する理解を促進し、学習と指導のための、いわば触媒の役割を担ってきた財団です。

また、理事長が努めております United Boardからは、ナンシー・チャップマン理事とスタッフがお祝いを申し上げます。今年創立90周年を迎える当機関は、貴学との長年にわたるパートナーシップに深く感謝しております。我々のニューズレター

「Horizons」の最新号では日比谷先生の昨年の学長就任に関する記事を掲載させていただき、貴学を起点とし、さらに大きく広がっていくであろうリベラルアーツ教育の再生に対する日比谷学長のリーダーシップを改めて実感したところです。

さらに、長年にわたり、師となり大切な友人となってくださっている United Boardのお二人の名誉理事、山本和・貴学総務理事と千葉眞・貴学教授に、特に感謝の意を表させていただきます。

記念日とは:

大学で創立記念日を祝うのはなんのためでしょうか?いくつかの理由が考えられます。献学の理念を再認識するため、あるいは、献身的にときに犠牲的に目の前の責務を果たし、今日の繁栄をもたらした先人に感謝するため、または、今ここにいる己を再認識するため。我々は今、どこにいるのかという問いに答え、さらに、使命の共有という喫緊の、かつ未来に向けても重要な問題に、再び我々自身を向かわせるためです。

この国のことはなにもわからぬに等しい身ではありますが、日本では60歳の誕生日というものに特別な意味があることは知っています—そう、還暦ですね。ICUは60歳の記念日を迎えて、一個の人間と同じく、真の成熟に到達したところなのです。還暦祝いの赤い服をまとい、幼少の頃の驚異にあふれた世界に戻ることができるという瞬間に。優れた幻視者であった英国の詩人ウィリアム・ブレイクは、民主主義革命の時代にあって、すでにこの霊妙な経験を自らの作品「無心の歌、有心の歌」で探求していました。つまり、労苦や辛い経験を経て成長した後では、我々は、子どもの頃の無邪気さを、子どもよりもはるかに高い次元で再度獲得することができるのです。子どものように、とつまり神が見るようにということですが、真実の世界を目にすることがかなうのです。そこは美と調和と希望にあふれ、いっさいの束縛から自由な場所です。ですから、60歳を迎えたICUは、誇りをもって過去を想起するだけでなく、その営みを新たに始めなければなりません。ちょうど、毎年新入生が入学するたびに、

Dialogue

Creating the Next 60 Years

ICUが自らの根源的な使命の螺子を新たに巻き直すように。

過去を想起する：

ここで、この特別な大学の創立時を振りかえってみましょう。1950年代、日本人がおかれていた荒廃はいかばかりだったのでしょうか。明日をも知れぬ不安、失ったものの大きさ、そして恐怖。この悲劇的な状況と、精神的なよりどころの喪失は、ちょうど、初期の使徒たちを描いた福音書の記述を思い起こさせます。キリストの受難と死の後、悲嘆にくれて上階の部屋に集まった彼らの経験は、第二次世界大戦という惨事に直面したICUの創立者たちに通じるものがあります。弟子たちは、もっとも想像していなかったとき、神が去ってしまったとしか思えなかった場所に、キリストが依然として存在していることに気づきます。キリストが始めた仕事を全うするため、その御霊が自分たちに力を与えていることを悟るのです。

非難と恥に逃げ込もうとするのはたやすいことでした。けれど、ICUの創立者たちは、戦いではなく和解という険しい道を選んだのです。孤立することを拒み、日本と、日本以外の国の間に、平和の橋を架けたのです。ICUの物語は、20世紀における教育上の奇跡といえます。それは自らの恐怖を克服し、危険を冒しながら生きていくという物語です。・1953年、ICUは、初代学長の湯浅八郎博士が名づけたとおり、「明日の大学」として、その一歩を踏み出したのでした。



Dialogue

Creating the Next 60 Years

三つの使命:

一創立者たちのヒビジョンは、ICUの名を構成する三つの単語によりの確に表現されてきました。一つの名に刻まれ、体現された、互いに緊密に絡み合う三つの価値です。我々は、この三つの試金石をこれからも抱きつづけなければなりません。

第一に、ICUの創立者たちは、シンクタンクでも病院でも救援センターでもなく、リベラルアーツの理念に基づく「大学」を設立しました。もちろん、一つには戦後世代に対する教育上の必要性に答えるためという目的もありました。若者の働く場所を作り、経済的に自立するため、日本が景気を回復するための手段でもあったのでしょう。けれど、ICUには、「ヨハネによる福音書」にもあるとおり、キリストのメッセージに根ざしたより高い目標がありました・・真理を探究し続けるという使命です。創立時から現在まで、ICUは常に発見と自由な表現の場であり続けています。そこでは、常に複数の視点を持つことが重要です。そこは出会いの場です・・知との出会いであり、他者との出会いの場所です。現代の大学は、この二つの目的の均衡をとることに苦慮しており、いくつかはすでに失敗してしまっています。そうした大学のカリキュラムから学生が得る経験は、断片がりです。学生たちは協同のかわりに競争を支持し、個人の目的にのみとらわれて、より大きな社会的善を顧みなくなっています。ICUにおいては、教育の焦点は全人教育にあります。これこそ、リベラルアーツの精髓です。真理を探究するということは、結果的に我々を知的、社会的、文化的に自由にすることであり、これは神の約束を守ることなのです。

二番目に、歴史上常にキリスト教徒が厳然たる少数派であったこの国において、ICUの創立者たちは、その精神的支柱を「キリスト教」においた大学を建てました。このことはどういう意味を持っていたのでしょうか?どんな宗教を持つ学生も教職員も迎え入れていますから、設立は改宗を目的としたものではありませんでした。世界にキリスト教をもたらすという宣教的な動機よりも、むしろICUは常に、キリストの実存を認識していたのです・・そして、そのことを大学の営みと教育を通じて、全身全霊で伝えようとしてきました。本日お示した二カ所の聖書朗読箇所には、この信念がとても簡潔に表現されているのがおわかりになったかと思います。ICUにおいて、我々は単なる情報ではなく、真理を探究し、その真理は我々を自由にするのです。我々が獲得する自由は、隣人への愛という形でもっともよく表現されます。今日、ICUはアジア全域、どこか全世界を通じて、サービスマスターの指導者的存在として認

Dialogue

Creating the Next 60 Years

められていますが、サービスマーケティングとは、教室内での学びを隣人との協同に直結させるものです。本質的に、サービスマーケティングはキリストの実存を実践する学びです。個人を尊重し、各々の才能を集結し、この世界の絶え間ない飢餓問題に対処するための。

最後に、三つ目の言葉に刻まれた三つ目の使命についてお話ししましょう。荒れ狂うナショナリズムの恐怖にさらされた後でも、ICUの開拓者たちは、理念と実践の両面において「国際的」な場を作りあげました。当初から世界人権宣言の考えに基づき、学生たちが自らを地球市民であると考え、1950年代の日本にあつて、偏狭な視点を克服するための野心的な試みでしたが、同時に実際には達成するのが困難なものでした。当時、郵便物が太平洋を超えていくには何週間もかかりましたし、研究者が旅行や学術交流を行う機会は殆どありませんでした。テレビもまだまだ萌芽期のメディアでしたし、リアルタイムで遙か遠くの出来事を目にすることはできなかったのです。

今日にあつては、通信技術や輸送手段の発達、そして経済のグローバル化に伴い、大学には、国際的であるための新たな機会と新たな責任が生じています。インターネットを通して、教員も学生たちも、国を超えた研究活動や問題解決にいつでも参加することができるようになりました。MOOCs(大規模公開オンライン授業)の出現により、学生たちには、世界最高の講義に耳を傾け、さらに自宅にいながら、その講義について自分の指導教員やクラスメートたちと議論を深める機会が与えられています。

こうした技術革新の驚異は、時として大いなる誘惑者となります。キリスト教大学としてその使命を達成するためには、これら世界の距離を縮める手段を使うにあつてより思慮深くあらねばなりません。グローバル化が、富める国ともっとも貧しい国の格差を広げることがあつてはなりませんし、各国の色彩豊かな文化や社会的知識を虐げ、消し去ってしまう支配者となることは許されないからです。大規模な自然災害の際などには、たまたまこの地でお起きたあの恐るべき津波もですが、技術革新がいかに役立つかがわかります。瞬時につながり合い、役に立つ温かな支援を国境を超えてさっそくに始めることができるのですから。同じようなやり方をすれば、大学の学生教職員はみな、気候変動、環境悪化、伝染病や地球規模の飢餓といった迫り

Dialogue

Creating the Next 60 Years

来る課題に対して、世界中の大学にいる同僚たちと協力して取り組むことができます。

数日前、ニューヨークから成田に向かう飛行機の中で、私は窓越しに外を眺めました。遙かな下に、境界線や括りがいっさい存在しない、ただ一つの世界が広がっていました。我々に委ねられ、我々の手をひどく必要としている世界がそこにありました。ときどき、今この大学においてもそうなのですが、我々は神の視点を一瞬だけ、持つことがあるのですね。

貴学の初代学長湯浅八郎博士は、しばしば、旧約聖書の「箴言」を引いて言われました。「幻(ビジョン)のないところでは、民は墮落する」。ICUが献学60周年を迎える今、この箴言のちょうど逆もまた真であることがはっきりしました。「幻(ビジョン)があれば、人は栄える」のです。真実を求め、それによって自由を得、さらに他者との和解につなげていく道において、ICUは常に、オブティミズムの狼煙だったのでした。キリスト教の言葉を使うならば、ここは「希望の地」なのです。勇気をもって前進してください、ありがとうございます。創立時の幻、すなわち献学の理念をいつも若々しく、かつあるべき姿に保とうと真摯に努めてくださってありがとうございます。





Dialogue



Creating the Next 60 Years

います。明日の大学として、皆さんはこの世界の変革に取り組みつつ、未来に思いを馳せておられるのですね。皆さんおひとりおひとりと、そしてこの大学に神の祝福がありますように!

Please accept my congratulations.